

平成 28 年度共通教育アンケート(1 年次生対象) 実施報告書

大学教育センター

全学共通教育部門長 大塚 豊

1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

・前回平成 27 年度調査(2016 年 1 ～ 2 月実施)の回答率 73.5%に比べると、今回平成 28 年度調査(2017 年 1 ～ 2 月実施)の回答率は 49.9%とやや低調であったが、平成 26 年度以前よりは高い回答率を維持している。次年度以降、学生向けにより一層の周知徹底を図っていきたい。学部毎の回答率は、経済 29.0%、人間文化 54.7%、工 63.2%、生命工 55.3%、薬 49.7%であった。

2. 学修支援相談室をはじめとする大学教育センターの学修支援体制について

・大学教育センターが行っている各種の学修支援については、「まったく知らない」と回答した学生の割合が、前回の 9.6%から今回は 23.9%に増加している。学修支援相談室および数学基礎力 UP 講座への認知度はそれぞれ、前回調査の 20.7%、19.1%から今回は 32.6%、32.6%と上昇しているが、e ラーニングシステムについては、前回の 50.7%から今回は 10.9%と大きく減少している。昨年度と同様に各種学修支援の広報活動を行ってきたが、学生への周知機会拡充・方法の見直し等さらなる改善が必要と考えられる。

・学修相談室を知っていると回答した学生のうちで、実際に利用したことがあると答えた学生は約 15%にとどまる。その理由としては、「利用する必要がある」の 28.3%に次いで、「場所が分からない」が 23.5%を占めている。数学基礎力 UP 講座を利用したことがないと回答した学生のうちでも、その理由として「利用する必要がある」の 39.3%、「時間が合わない」の 21.8%に次いで、「場所が分からない」が 17.3%を占めている。開催場所等の情報は本学 HP・掲示板等で公開されているが、学生に浸透しておらず、平成 29 年度より新システムに更新される e ラーニング教材の活用も含めて学修支援に関する広報活動のさらなる強化が必要である。

・高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要である」、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 79.2%で、前回調査の 77.3%とほぼ同程度であった。依然として、リメディアル教育に対する潜在的な需要は高水準にあるものと思われる。これら学生が学力補填を望む科目は、上位から順に英語 24.7%、数学 20.7%、生物 14.9%、物理 11.8%等、前回調査と同様に英語以外は理数系科目が上位を占めている。

3. 共通教育全体について

・「共通教育科目で充実していると思われる科目群」という設問では、教養ゼミ、日本語表現、情報リテラシーがそれぞれ、前回の 10.5%、13.1%、10.5%から今回は 19.2%、16.5%、

16.3%と評価が向上しており、担当教員の努力の成果といえる。

・「入学当初、共通教育に期待していたこと」という設問では、上位から「専門での勉強の基礎」18.3%、「専門以外の幅広い知識・教養」16.3%、「実用的な知識・技能」15.8%等の順になっており、前回調査結果とほぼ同様の傾向を示している。「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」については、満足度70%以上と回答した学生の割合は25.9%である。

・初年次教育科目すなわち教養ゼミを履修して良かった点については、上位から「高校生活(学習)から大学生活(学修)へスムーズに移行できた」25.1%、「大学生としての学修スキルが身についた」11.6%、「コミュニケーション能力が向上した」9.8%等の順になっている。一方、改善点については、「特に改善点はない」という回答が43.8%と過半近くを占めるが、「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」10.9%、「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」9.5%等の要望も出されている。

・教養講座に関しては、「幅広い教養が身についた」27.9%、「知的好奇心をくすぐった」20.5%等のポジティブな回答の割合は前回調査より増加し、「あまり興味の持てないような内容が多かった」14.9%、「難しい内容が多かった」7.6%というネガティブな回答の割合は前回調査より減少した。概して、今年度の教養講座は前年度より学生の評価が高かったといえるが、今後も目の前にいる学生を意識した講師選定を継続していくことが求められる。

4. 語学・リテラシー科目について

・「日本語表現」については、上述の「共通教育科目で充実していると思われる科目群」という設問で前回より評価が向上しており、科目として「とても満足した」、「ある程度満足した」と回答した学生の割合は65.1%であり、授業の時間数と難易度についても、69.0%の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答している。

・「情報リテラシー」についても、上述の「共通教育科目で充実していると思われる科目群」という設問で前回より評価が向上しており、科目として「とても満足した」、「ある程度満足した」と回答した学生の割合は75.9%に達し、授業の時間数と難易度についても、79.0%の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答している。

・「英語科目」については、「共通教育科目で充実していると思われる科目群」という設問での評価が9.4%と前回の15.6%より低下したが、科目そのものについては「とても満足した」、「ある程度満足した」と回答した学生の割合は71.2%と前回の65.8%より増加している。授業の時間数と難易度についても、73.1%の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答している。

・アンケートに回答した学生のうちでは、「初修外国語」の選択においては、62.2%が中国語、29.0%がドイツ語、8.8%がフランス語を履修している。これら3科目の総合として「とても満足した」、「ある程度満足した」と回答した学生の割合は73.7%と前回の64.2%から増加しており、授業の時間数と難易度についても、78.8%の学生が「今の程度の時間数や内

容でよい」と回答している。

5. 教養教育科目について

・「共通教育科目で充実していると思われる科目群」という設問での教養教育科目 A～F 群における群別の評価では他の群にも増減が見られるが、D 群[思索と創造]での前回 2.0% から今回 10.1% への上昇、E 群[芸術と健康・スポーツ]での前回 12.9% から今回 2.1% への低下が際立っている。自由記述欄で、「体育の実施日をもっと増やして欲しい」という意見が出されており、このような不満がその一因かと推察している。教養教育科目は多様な科目群で構成されているが、教養教育科目総体として見た授業時間数と内容については、「今の程度の時間数や内容でよい」と回答した学生の割合は 78.8% と前回の 74.5% より増加している。

・教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」32.5%、「資格取得」24.1%、「基礎学力の向上」20.6%等の順になっている。特に、「資格取得」の項目は前回の 4.9% から回答率が急増しており、教員免許等の資格取得を目指す学生数の増加を反映しているものと考えられる。履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」32.7%、「知的好奇心を満たした」24.2%、「基礎学力が向上した」13.4%等の順になっている。

6. キャリア教育(1 年次履修のキャリアデザイン I)について

・キャリアデザイン I については、科目として「とても満足した」、「ある程度満足した」と回答した学生の割合は 54.3% と前回の 49.8% よりやや増加している。授業の時間数と難易度については、56.0% の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答している一方で、25.4% の学生が「今よりも少ない時間数や内容でよい」と回答しており、入学 1 年目で未だキャリア教育の意義を十分に認識できていない学生も一定程度いるものと思われる。

・キャリアデザイン I を履修して良かった点については、上位から「自己分析ができた」32.5%、「社会人基礎力がついた」16.8%、「将来の目標ができた」12.4%等の順になっている。「卒業後、社会で求められる力を身に付ける授業を受講したいと思いますか」という設問についての回答では、「是非とも受講したい」、「ある程度受講したい」がそれぞれ、前回の 6.9%、19.9% から、今回は 29.1%、52.0% と急増しており、学生がキャリア教育を求めるニーズの高まりを窺うことができる。

7. 学生の学修意欲について

・本年度 1 年次生における学修意欲の調査結果では、「非常に意欲あり」、「まあまあ意欲あり」と回答した学生の割合は入学当初 80.6%、前期終了時 79.4%、学年末 78.2% とほとんど落ち込むことなく、ほぼ一定の水準を維持している。これに対して、「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」と回答した学生の割合も入学当初 5.3%、前期終了時 4.3%、学年末 4.8% と、残念ながらほぼ一定している。これら学習意欲を維持できないあるいは持てない

学生層にどう対処するかは、早急に取り組むべき教育課題として今後に残されている。

8. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえて、全学共通教育の改善策について述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、全体としての回答率が26年度以前に比べれば高いとはいえ、前回に比べて大幅に減少したことはまことに遺憾である。大学教育センター運営委員会を通じて、委員である各学科長に調査への協力を学生に対して周知して頂くように繰り返し要請したり、ゼルコバや学生への一斉メールでの回答呼びかけを行ったにもかかわらず回答率が低下した。このことに関して、やはり学科長から学生への注意喚起が最も効果的と思われるので、次年度以降、学科長各位にさらなる尽力を要請するつもりである。

毎年のように問題になる学修支援相談室など大学教育センターによる学修支援への認知度の低さを改善する手始めとして、新年度には新入生オリエンテーションに際して、学内各施設への新入生の案内のルートに学修支援相談室などを組み入れることを各学部・学科に要請した。

教養ゼミは大学教育センターの所管ではなく、各学科の担当科目であるが、本アンケートの結果を各学科長に運営委員会を通じて知らせ、なおいっそうに改善に向けての努力を求めることとしたい。

語学・リテラシー科目、教養教育科目、キャリア教育がいずれも比較的高い評価であったことは喜ばしく、各科目の担当教員がさらに気を引き締め、質の高い授業を展開していくように心がけることとする。

以上